

日本文学の扱いに対する日本語教師の認識の考察

Perceptions of Literature Usage in JSL Teaching

リッチングス ヴィッキー
アン
関西学院大学

Richings, Vicky Ann
Kwansei Gakuin University

Reference Data:

Richings, V. A. (2013). 日本文学の扱いに対する日本語教師の認識の考察 [Perceptions of literature usage in JSL teaching]. In N. Sonda & A. Krause (Eds.), *JALT2013 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

本研究の目的は、日本語の授業における日本文学教材の使用の現状と学習リソースの一つとしての日本文学の扱いに対する日本語教師の認識を考察することである。研究目的を達成するために、47名の日本語教師を対象に選択肢式と自由記述から構成されるアンケート調査を行った。アンケートで得られた選択肢式の回答を量的分析し、自由記述はSCAT (Steps for Coding and Theorization) 手法をもって分析した。調査の分析結果により、日本語教師の多くは日本文学を一つの学習リソースとしてとらえ、学習意義があると認識し、様々なメリットを見出していることが明らかになった。また、日本語の授業で文学的テキストを取り上げるために様々な情報提供を求めていることがわかった。文学教材をより扱いやすいものにするには、困難とされる点を解消し、求められる要素を再検討する必要がある。これらの点を考察し、提案していくのが今後の課題となる。In this paper I report on an investigation of Japanese language teachers' attitudes toward the use of Japanese literature in the Japanese language classroom and aim to reveal the present status of Japanese literature as a learning material. A questionnaire was administered to 47 Japanese language teachers and the obtained qualitative data was analyzed using SCAT (Steps for Coding and Theorization). The results showed that most of the teachers involved think that Japanese language learners could indeed benefit from the use of Japanese literature as a learning tool. The results also revealed that many teachers are looking for more practical information concerning the use of literature in the Japanese language classroom. Therefore, in order to make literature a more accessible learning tool to teachers, it is necessary to reconsider the elements that are perceived as being disadvantages or problems.

EFLやESLの世界では、文学が一つの教材として認識され、積極的に活用されている。また、文学的テキストの学習リソース (learning resources) としての意義、メリットとデメリットが多方面から議論されており、文学的テキストを外国語の学習に活かすための提案が数多くされている (Gilroy & Parkinson, 1997; Maley, 2001; Mc Kay, 2001; Vandrick, 2003; Widdowson, 1983)。先行研究では、文学的テキストを教材として用いるメリットが三つのモデル「言語モデル」「文化モデル」「自己啓発モデル」にまとめられている。つまり、教材としての文学が言語能力と自己啓発と批判的・分析的思考力を促し、文化の気づきを促進すると考えられている。また、学習過程において、文学は、(a) 学習の動機付けに効果的である、(b) 利用可能で便利かつオーセンティックな教材である、といった様々な役割が提唱されている。

一方、デメリットとして挙げられているのはメリットとして挙げられている点に対する反論であり、つまり教材としての文学が (a) 言語能力と、(b) 自己啓発と批判的・分析的思考力を促さない、(c) 文化の気づきを促進しないことである。加えて教師の視点からの問題点として (a) 文学的テキストの選定は難しい、(b) 文学的テキストの使用に対し教師が抵抗を感じるなどといった点も述べられている (Edmondson, 1995; Maley, 2001; McKay, 2001; Vandrick, 2003; Widdowson, 1983)。その一方で、JFLやJSLでは、外国人留学生を対象とした日本語の授業における読む活動の多くは論説文を対象としたものであり、文学教材は「日本語学習」という舞台に僅かしか登場していないことが先行研究においても指摘されている (池田, 2005)。日本語の読解ストラテジーや教授法に



関する研究は進んでいるものの、文学教材の使用の是非についてはほとんど議論されていないのが現状である(伊藤, 1991; 菊池, 1996; 南久園, 1997)。つまり、外国人留学生を対象とした日本語の授業における文学教材の扱いは非常に限られている(Richings, 2012)。

本研究の目的は、EFLやESLにおける文学教材の扱いと同様に、JFLやJSLにおいても日本文学の教材としての価値を見いだせるかを検討することを目標に、日本語教師に対するアンケート調査を実施することを通して、文学教材の使用の現状と、文学教材の使用に対する教師の認識を明らかにし、日本語教育における文学教材の位置づけを把握することである。それにあたり、以下の研究課題をもって調査する。

1. 日本語教育の現場では、文学作品はどれほど、そしてどのように扱われているのか。
2. 文学作品を教材とする際のメリットとデメリットを日本語教師はどう考えているのか。

研究方法

上述した研究目的を達成するために、選択肢式と自由記述から構成されるアンケートを作成し、47名の日本語教師を対象に調査を行った。調査協力者に、まず、日本語の授業で文学教材を使用したことがあるか否かを問い、経験有りと無しそれぞれのグループに対して異なる質問に答えてもらった。次に、全員に「日本文学作品を学習リソースの一つとして日本語の授業で取り上げるのに一番困難なことは何だと思えますか」「一番必要なことは何だと思えますか」と聞き、最後に20の質問からなる5段階評価問題を用意した。5段階評価問題は、その回答を自由記述の回答と比較し、多面的に分析することによって、日本語教師の日本文学の使用に対する認識をさらに深く掘り下げると同時に、先行研究において主張されている文学的テキストのメリットとデメリットがどのように反映されているのかを探るために取り入れた。アンケートで得られた選択肢式の回答を量的に分析し、自由記述はSCAT (Steps for Coding and Theorization; 大谷, 2008) 手法をもって分析した。SCAT手法とは、面接記録やアンケートの自由記述等の小規模の言語データをセグメント化し、最後にストーリーラインとそこから読み取れる理論を記述するという分析方法である。

アンケートの回答分析

調査協力者概要

調査協力者は、様々な教育機関に勤める47名の日本語教師であり、全員が日本人である。47名のうち、33名(70%)は日本文学を使ったことがあり、14名(30%)は使ったことがないと答えた。調査に協力したほとんどの教師は日本語学校と大学といった教育機関で日本語を教えており、初級から中級レベルまでの担当が最も多く、超級レベルの担当は最も低い。担当している授業は、「総合日本語」が最も多く、その次は、文学的テキストを使用したことがある教師の場合、「読む」授業であり、文学的テキストを使用したことがない教師の場合、「話す」授業である。表1はそれぞれのグループの「日本文学を読むことが好きですか」と「今後も日本文学を取り上げたいですか」または「日本文学を取り上げてみたいですか」に対する回答をまとめたものである。

まず、「使ったことがある」と答えた教師のうち、25名は日本文学が好きであり、22名は今後も日本文学を教材として授業に取り入れたいと答えている。自由記述でその理由を聞いたところ、様々な意見が述べられた。それぞれの意見を上述したSCAT手法をもって言語データをもとにセグメント化し、分析した結果、日本文学教材は「学習リソースの一つであり」、日本文学を取り上げることが「文化理解を促す」「日本語の学習動機付けとなる」「言語習得につながる」「日本語の美を鑑賞することができる」「学習意義がある」「学習者のニーズが存在する」「思考能力を促す」「読解力を促す」などと考えられているようであることがわかった。同じく、今後日本文学を取り上げたくない(2名)もしくはわからない(9名)と答えた人の理由をセグメント化し、分析した結果、「学習者の関心やニーズに合わせるのが難しい」「学習者の日本語のレベルに合わせるのが難しい」「職場の規定が問題」「教授法が難しい」「作品選定が難しい」「学習意義がはっきりしない」「日本文学教材は日本語のクラスの中では学習リソースの一つではない」などと考えられているようであることがわかった。一方、文学的テキストを「使ったことがない」と答えた14名の教師のうち、6名は日本文学が好きであり、9名は日本文学を教材として授業に取り上げてみたいと答えている。その理由は、日本文学を取り上げることが「日本語の学習動機付けとなる」「文化理解を促す」「学習意義がある」などで、文学作品を取り上げた教師と同じ意見が挙がっている。取り上げたくない(2名)もしくはわからない(2名)と答えた教師の理由は、「教師自身の興味関心の問題」「学習者のニーズが低い」「担当するレベルに合わない」「日本文学の扱い方・指導法がわからない」「学習者の関心やニーズに合わせるのが難しい」「学習意義がはっきりしない」などである。

表1. 文学的テキストの使用について

文学的テキスト使用有り		文学的テキスト使用無し	
1. 日本文学を読むことが好きですか。			
好き	25 (53%)	好き	6 (13%)
好きではない	1 (2%)	好きではない	4 (9%)
わからない	0 (0%)	わからない	0 (0%)
どちらでもない	7 (15%)	どちらでもない	4 (9%)
2. 今後も日本文学を取り上げたいですか。			
取り上げたい	22 (47%)	取り上げてみたい	9 (29%)
取り上げたくない	2 (4%)	取り上げたくない	2 (4%)
わからない	9 (29%)	わからない	2 (4%)
どちらでもない	0 (0%)	どちらでもない	2 (2%)

選択肢の回答分析

表1に示した質問に続いて、それぞれのグループに以下の通りの質問を留意した。

1. 取り上げるまたは取り上げてみたい文学的テキストのジャンル
2. 文学的テキストの使用基準となるもの・使用形態・指導法
3. 学習者のレベルとその時の学習目標

文学的テキストを使用したことがある教師に、これまでに日本語の授業で取り上げたテキストジャンル(1. 小説、2. 詩・短歌・俳句、3. 劇、4. その他)について聞いたところ、使用されたテキストジャンルのほとんどは小説(27名, 82%)であることがわかった。詩を使用したことがある教師は18名(55%)、劇は3名(9%)であり、「その他」のテキストジャンルは、「おとぎ話」「エッセイ」「昔話」「童話」「実話に基づく物語」である。使用されたテキストは古典や純文学から大衆文学まで幅広く、今回の調査において、約60点の作品(『注文の多い料理店』(宮沢賢治)、『ポッコちゃん』(星新一)、『坊ちゃん』(夏目漱石)、『浦島太郎』、『竹取物語』、『桃太郎』など)が挙げられた。

次に、文学的テキストの使用基準、使用形態、指導法を問うたところ、小の使用基準は、「作品の日本語レベル」81%、「職場で定められている教科書」41%、「その作品が好きである」37%、の順である。取り上げた形態に関しては、「教科書の一部(67%)」、「自分で作ったプリント(52%)」と「作品そのもの(44%)」を使用した教師が一番大きい割合を占めている。どのような教授法で小説を取り上げたのかという質問に対し、コミュニカティブ・ア

プローチ30%、ピア・リーディング30%、文法翻訳法26%、など様々な教え方が取り入れられていた。ただし、各指導法に対する回答数が本当に現実を表しているかどうか、それぞれの教授法が理解された上で応用されていたかどうかは今回の調査から明らかではない。詩の場合、使用基準は「作品の日本語レベル」が最も多く、44%である。取り上げた形態は「自分で作ったプリント」が最も多く33%であり、指導法はほとんど「コミュニカティブ・アプローチ(33%)」である。劇に関しては、「作品の日本語レベル(67%)」が使用基準、「作品そのもの(33%)」が使用形態、そして「ピア・リーディング(33%)」や「ストーリー・グラマー・アプローチ(33%)」が指導法として挙げられている。

最後に、文学的テキストを取り上げた時の、学習者のレベルとその時の授業の学習目標についての質問の回答(表2)を見ると、上級レベルが最も多く、その次は中級レベル、中上級レベルの順である。授業の目標に関しては、「読む能力の向上」という学習目標が目立ち、その次に「総合的能力の向上」の数値が高い。一方、初級レベルと初中級レベル学習者に対しても、文学作品が使われていることが読み取れる。この場合の学習目標は上級レベルと同じく「読む能力の向上」と「総合的能力の向上」の回答数が他より高いが、「聞く能力」や「話す能力の向上」を学習目標にしている教師もいる。また、超級レベルの学習者の学習目標に関しては、上級レベルとほぼ同じだが、それと同時に「文化の気づき」「日本文化入門」「日本文学入門」などといった目標を背景に文学作品を使っている教師が多数いることが示されている。

表2. 学習者のレベルと学習目標(経験あり), $n = 33$

学習目標と学習者のレベル	初級	初中級	中級	中上級	上級	超級	合計(%)
1. 聞く能力の向上	1.40%	0.93%	1.40%	0.47%	1.40%	0.00%	5.61%
2. 話す能力の向上	1.40%	0.93%	2.34%	0.93%	1.87%	0.47%	7.94%
3. 読む能力の向上	1.87%	3.27%	6.07%	5.14%	5.61%	3.27%	25.23%
4. 書く能力の向上	0.47%	0.93%	2.80%	3.27%	3.27%	1.87%	12.62%
5. 総合的能力の向上	0.47%	2.34%	3.74%	3.27%	5.61%	3.27%	18.69%
6. 文化気づき	0.93%	0.93%	1.87%	1.87%	5.14%	2.34%	13.08%
7. 日本文化入門	0.47%	0.93%	0.93%	0.93%	1.87%	1.87%	7.01%
8. 日本文学入門	0.00%	0.93%	1.40%	0.93%	1.40%	1.87%	6.54%
9. その他	0.47%	0.47%	0.47%	0.00%	0.93%	0.93%	3.27%
合計(%)	7.48%	11.68%	21.03%	16.82%	27.10%	15.89%	100.00%

続いて、日本文学を使用したことがない教師の選択肢に対する回答を見る。前述したように、日本文学を使用したことがないが取り上げてみたいと思う教師は9名である。取り上げたい形態、基準となるもの、指導法はおよそ日本文学を使用したことがある教師の結果と一致する。また、学習者のレベルとその時の学習目標に関しては、表3に見られるように、文学作品を使ったことがない教師は、「読む能力の向上」や「文化の気づき」「日本文化入門」「日本文学入門」などを学習目標に文学的テキストを使いたいと答えていた。一方「読む」技能以外の言語技能の向上に文学的テキストを取り上げたいと思う教師は少ない。学習者のレベルについては、超級レベルの学習者を対象に文学的テキストを取り上げてみたいと考えている教師が最も多い。その次は上級レベルである。中級レベル以下で日本文学を使いたいもしくは使えらると考えている教師は少なかったが、まったくくないというわけではなかった。

表3. 学習者のレベルと学習目標 (経験なし), $n = 14$

学習目標と学習者のレベル	初級	初中級	中級	中上級	上級	超級	合計(%)
1. 聞く能力の向上	1.33%	1.33%	0.00%	1.33%	2.67%	2.67%	9.33%
2. 話す能力の向上	0.00%	0.00%	1.33%	1.33%	1.33%	4.00%	8.00%
3. 読む能力の向上	0.00%	1.33%	1.33%	5.33%	6.67%	5.33%	20.00%
4. 書く能力の向上	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.33%	2.67%	4.00%
5. 総合的能力の向上	0.00%	0.00%	0.00%	1.33%	2.67%	2.67%	6.67%
6. 文化気づき	1.33%	1.33%	1.33%	2.67%	5.33%	6.67%	18.67%
7. 日本文化入門	1.33%	1.33%	1.33%	4.00%	5.33%	4.00%	17.33%
8. 日本文学入門	0.00%	0.00%	1.33%	4.00%	5.33%	4.00%	14.67%
9. その他	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.33%	1.33%
合計(%)	4.00%	5.33%	6.67%	20.00%	30.67%	33.33%	100.00%

自由記述回答の分析

選択肢の質問の次に、「日本文学作品を学習リソースの一つとして日本語の授業に取り上げるのに一番困難なことは何だと思いますか」「一番必要なのは何だと思いますか」という2つの質問を用意し、自由記述で答えてもらった。記述内容をSCAT手法で分析した結果、表4と5に示す概念が抽出された。文学的テキストを使ったことがある教師にとっては、「作品選定」と「学習者のニーズ」が最も難しい点である。その次は、「学習時間の確保」「日本文学の教材化」「学習動機付け」「教授法」「教師の日本文学に関する知識」「学習意義・学習目標・学習評価」「職場の規定」の順である。教師が学習者側に必要だと考えているものは、「日本語のレベル」「読解力」「文化的知識」「文化理解」である。

一方、文学的テキストを使用したことがない教師は、「学習動機付け」「授業の準備」「日本文学の教材化」「学習時間の確保」「学習意義・学習目標」、その次に「職場の規定」「学習者のニーズ」「作品選定」を難しい点として認識している。また、学習者側に必要だと考えているものは、「日本語のレベル」と「文化的知識」である(表4)。文学的テキストを使ったことがある教師の回答と同じ概念が抽出されている一方で、中には、「全員の関心が異なる」「全員の興味と合わないことがある」「日本語の授業では、生活、コミュニケーション、学業のための日本語の習得が優先され、文学に時間を割く余裕がない」などという具体的な指摘も見られた。

表4. 日本文学作品を取り上げるのに一番困難なこと

経験有り	経験無し		
作品選定	11人	学習動機付け	2人
学習者のニーズ	8人	授業準備	2人
学習者の日本語のレベル	6人	教材化	2人
学習時間の確保	3人	学習時間の確保	2人
教材化	3人	学習目標	2人
学習者の読解力	2人	職場の規定	1人
学習動機付け	2人	学習者の日本語レベル	1人
教授法	2人	学習者の文化的理解	1人
教師の日本文学に関する知識	2人	学習者のニーズ	1人
学習意義	2人	学習意義	1人
学習目標	1人	作品選定	1人
学習評価	1人		
学習者の文化的知識	1人		
学習者の文化理解	1人		
職場の規定	1人		

後者の質問、「日本文学作品を学習リソースの一つとして日本語の授業で取り上げるのに一番必要なことは何だと思いますか」に対する回答を分析した結果、次のことがわかった。文学的テキストを使用したことがある教師の多くは、「ニーズに合った作品の選定」と「学習意義・学習目標の設定」「適切な教授法」が最も必要であると述べ、その次に「学習動機付け」「教

師の日本文学に対する知識」「教師の育成」「学習時間の確保」「学習評価の提示」「職場の規定」と「著作権」の順である。学習者側に必要とされているのは、「読解鑑賞能力」「ある程度の日本語能力」「文化理解」「読解力」である。これに対し、文学的テキストを使用したことがない教師は、「適切な教授法」「学習目標の設定」「学習動機付け」「職場の規定」「日本文学の教材化」「授業準備」と「学習者の読解力と読解鑑賞能力」といった点を検討する必要があると考えているようである。学習者側に必要だと思われる要素は、「読解力」と「読解鑑賞能力」の二つである。後者の質問に対しても、「全員がそれに興味をもっていること」が必要であるという意見が目立ち、結果的に、文学的テキストを使ったことがある教師と同じ概念が抽出されているといえる(表5)。

表5. 日本文学作品を取り上げるのに一番必要なこと

経験有り	経験無し
作品選定 8人	教授法の提示 3人
学習者のニーズに合うこと 7人	学習目標の提示 3人
教授法の提示 5人	読書鑑賞(内容を味わうこと) 2人
学習意義の提示 5人	学習動機付け 2人
学習目標の提示 5人	職場の規定の緩和 1人
学習動機付け 3人	学習者の読解力 1人
読解鑑賞 1人	教材化 1人
教師の日本文学に関する知識 1人	授業準備 1人
学習者の日本語のレベル 1人	
学習者の文化理解 1人	
教師の育成 1人	
学習時間の確保 1人	
学習評価の提示 1人	
学習者の読解力 1人	
職場の規定の緩和 1人	
著作権 1人	

5段階評価問題の分析

最後に全員に20問からなる5段階評価問題を用意し、日本語教師の「日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした授業における日本文学の使用について」の見解を総合的に調べた。20項目の内容は上述した先行研究(Edmondson, 1995; Gilroy & Parkinson, 1997; Maley, 2001; McKay, 2001;

Vandrick, 2003; Widdowson, 1983)で提唱されている文学的テキストのメリットとデメリットと、教材としての日本文学に対する教師の意見を問う設問を組み合わせたものである。表6は5段階評価問題の20項目である。

表6. 5段階評価問題, N = 47

	パーセント	そう思う	少し思う	ない	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない
日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした授業における日本文学の使用について							
1. 日本文学は教材として価値のあるものである	68.1	21.3	8.5	2.1	0.0		
2. 日本文学は学習リソースの一つである	85.1	12.8	0.0	2.1	0.0		
3. 教科書は日本文学をもっと提供すべきである	12.8	25.5	42.6	12.8	6.4		
4. 日本文学を教材としてシラバスに取り入れるべきである	21.3	14.9	46.8	10.6	6.4		
5. 日本文学を取り上げる教材をもっと増やして欲しい	23.4	23.4	34.0	8.5	10.6		
6. 日本文学を取り上げるための類型やレベルなどについての基準が欲しい	29.8	31.9	10.6	19.1	8.5		
7. 日本文学を用いる教材があれば日本語の授業で使いたい	36.2	25.5	21.3	8.5	8.5		
8. 日本文学の類型やレベルなどについての基準があれば日本語の授業で使いたい	29.8	21.3	23.4	14.9	10.6		
9. 教師にとって、日本文学作品を取り上げる授業の準備は大変	34.0	21.3	25.5	14.9	4.3		
10. 教師にとって、日本文学を用いる教材の選定は難しい	44.7	25.5	12.8	10.6	6.4		
11. 日本文学に関する自分の知識が足りるかどうか不安	27.7	23.4	19.1	21.3	8.5		
12. 日本文学を用いるための授業時間が足りない	29.8	19.1	34.0	10.6	6.4		
13. 初級レベルの段階では日本文学を取り上げることは難しい	25.5	31.9	17.0	21.3	4.3		
14. 日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした日本文学の読解は学習者のニーズに応える	36.2	29.8	14.9	17.0	2.1		
15. 学習者は日本文学を通して「日本語能力」を身につけることができる	40.4	19.1	34.0	6.4	0.0		
16. 学習者は日本文学を通して「文化気づき」を身につけることができる	44.7	42.6	6.4	4.3	2.1		
17. 学習者は日本文学を通して「自己啓発と批判的・分析的思考力」を身につけることができる	17.0	21.3	38.3	17.0	6.4		
18. 学習者は日本文学を通して日本語学習の「動機付け」が得られる	27.7	27.7	31.9	10.6	2.1		
19. 学習者は日本文学を通して「楽しく」日本語の学習ができる	25.5	34.0	29.8	8.5	2.1		
20. 学習者は日本文学や日本文化の「美を鑑賞する」ことができる	21.3	25.5	29.8	17.0	6.4		

各設問の合計点をもって、メリットとデメリットを類別した観点からデー

タを分析した結果、日本語教師は、(a) 日本文学は教材として価値がある、

(b) 学習リソースの一つである、(c) 日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした日本文学の読解は学習者のニーズに応える、(d) 学習者は日本文学を通して「日本語能力」と「文化の気づき」を身につけることができる、(e) 学習者は日本文学を通して「楽しく」日本語の学習ができるといったメリットを見出しており、(f) 日本文学を用いる教材があれば日本語の授業で使いたい、(g) 日本文学の類型やレベルなどについての基準がほしい、またはあれば日本語の授業で使いたい、という要望を示している。

反対に多くの教師が、(a) 日本文学作品を取り上げる授業の準備は大変、

(b) 日本文学を用いる教材の選定は難しい、(c) 日本文学に関する自分の知識が足りるかどうかが不安、(d) 初級レベルの段階では日本文学を取り上げることは難しいという要素をデメリットとして認識しているようである。また、(a) 教科書は日本文学をもっと提供すべきである、(b) 日本文学を教材としてシラバスに取り入れるべきである、(c) 日本文学を取り上げる教材をもっと増やして欲しい、(d) 日本文学を用いるための授業時間が足りない、

(e) 学習者は日本文学を通して「自己啓発と批判的・分析的思考力」を身につけることができる、(f) 学習者は日本文学を通して日本語学習の「動機付け」が得られる、(g) 学習者は日本文学や日本文化の「美を鑑賞する」ことができる、という7点に関しては「どちらでもない」という解答が最も多く、つまりそれらの点に関しては、日本語教師がメリットもデメリットも見出せなかったことを意味する。

分析結果の考察

選択肢設問と5段階評価の分析結果の考察

「調査協力者概要」のところで述べた、日本語教師が「今後も日本文学を教材として授業に取り入れたい」と考える理由が前節で記した5段階評価問題のデータ分析によって得られた結果とどの点において一致するのかを調べたところ、日本文学教材は、(a) 学習リソースの一つであり学習意義がある、(b) 文化理解を促す、(c) 言語習得につながる、(d) 学習者のニーズが存在する、の4点が一致することがわかった。これらの点を上述した先行研究(同上)において文学的テキストのメリットとして提唱されている点と照らし合わせてみると、教材としての日本文学は「学習リソースの一つであり便利なオーセンティックな教材である」「言語習得につながる」「文化の気づきを促す」といった点が反映されていることがわかる。同じく、日本語教師の「文学的テキストを取り上げたくない」もしくは「取り上げるかどうか分からない」に対する理由が上述した5段階評価問題の分析結果とどの点において一致するのかを調べたところ、(a) 学習者の日本語のレベルに合わ

せることが難しい、(b) 学習者のニーズに合った作品選定が難しい、(c) 日本文学に関する自分の知識が足りるかどうかが不安で、教師自身の興味関心の問題である、の3点が一致することがわかった。また、これらの点を先行研究(同上)において文学的テキストのデメリットとして提唱されている点と照らし合わせてみると、「学習者のニーズに合った作品選定が難しい」「日本文学に関する自分の知識が足りるかどうかが不安である」といった点が反映されていることがわかる。

文学的テキストの使用基準・使用形態・指導法について

文学的テキストの使用基準・使用形態・指導法に関しては、経験を問わず、日本語教師の意見がほぼ一致するといえる。総合的にみると、使用基準は「作品の日本語レベル」「職場で決められている教科書やカリキュラム」、取り上げる形態は「教科書」「自分で作ったプリント」「作品そのもの」、指導法は「コミュニケーション・アプローチ」「文法翻訳法」「ピア・リーディング」に集中する。

文学的テキストを取り上げる時の学習者のレベルと学習目標という点においては、経験によって意見が少し分かれるが、結論的にいうと、中級レベル以上、つまり上級レベルの学習者を対象に文学的テキストを使うことができると考えている日本語教師が最も多く、その時の学習目標はほとんどの場合「読み能力の向上」に集中する。しかし、文学的テキストが上級レベルだけを対象に、または「読み能力の向上」という学習目標を達成するためにだけ用いられているのではないということも今回の調査から判明した。

自由記述の分析結果の考察

日本文学を日本語の授業で取り上げるときに、「作品選定」と「学習者のニーズ」、その次は、「学習時間の確保」「日本文学の教材化」「学習動機付け」「教授法」「教師の日本文学に関する知識」「学習意義・学習目標・学習評価」「職場の規定」などの点が日本語教師にとって困難であり、日本文学を日本語の授業で取り上げるためには、特に「ニーズに合った適当なテキスト」「適切な教授法」「学習動機付け」「日本文学に関する教師の知識」

「教師の育成」「学習時間の確保」「学習意義・学習目標・学習評価の仕方の設定」「職場の規定」と「著作権」などといった要素を十分に検討する必要があると多くの教師が結論付けていることがわかった。困難な点と必要とされている点に関しては、経験を問わず意見がほぼ一致するといえる。さらに、困難な点と必要とされる点を、「選択肢設問と5段階評価の分析結果の考察」で述べた調査協力者が文学的テキストのデメリットとして認識する要素と比較してみると、同じ概念、つまり、「学習者のニーズ・学習者の日本

語のレベルが難しい」「学習者のニーズに合った作品選定が難しい」「自分の知識が足りるかどうかは不安」などが挙がっていることがわかる。

自由記述の分析結果からは、文学を教材として取り上げたい気持ちはあるものの、教師にとって教材としての日本文学を取り上げるための様々な情報が欠如しており、それが各自で文学を取り上げない理由の一つにもなっているのではないかということが窺える。また自由記述において、「日本文学は日本語の授業ではなく、専門分野のみで取り上げるべきである」「日本文学の範囲がはつきりしない」「上級レベルでないと使えない」「文学の鑑賞というのは個人的なものであるため日本語の授業での扱いは難しい」などの意見のように、日本文学は日本語教育の教材として不相当であると訴える教師もいる。日本語の授業における日本文学の取り扱いに対し、積極的に考える教師(66%)がいる一方、消極的に考える教師(34%)もいることが明らかとなった。

結論

本研究では、日本語の授業における日本文学教材の使用の現状と学習リソースの一つとしての日本文学の扱いに対する日本語教師の認識を考察し、二つの題目、1. 日本語教育の現場では、文学作品はどれほど、そしてどのように使われているのか、2. 文学作品を教材とする際のメリットとデメリットを日本語教師はどう考えているのか、をもって調査を行った。研究課題1に対し、日本文学が、自分で作ったプリント、教科書の一部や作品そのものなど、様々な形態で使われていることが判明した。用いられているテキストジャンルのほとんどが小説であり、劇が最も少ない。その時の、学習者のレベルは上級レベルと中級レベルが最も多いが、その他のレベル、とりわけ初級レベルの学習者でも文学的テキストが使用されている。続いて、研究課題2に対し、日本語教師は文学教材を取り上げることに様々なメリットとデメリットを見いだしており、先行研究(同上)において主張されている点のいくつかと重なることがわかった。日本文学を日本語の授業で取り上げるためには、難しいとされる点、必要とされる要素を十分に検討する必要があることが判明した。最後に、今回の調査から日本語教師が、学習者のレベルなどについての基準、日本文学の学習目標・教授法などに関する情報、日本文学の教材化の提供など日本文学を取り上げるための様々な情報を求めていることも明らかとなった。

以上をまとめると、多くの日本語教師は経験を問わず、日本文学を一つの学習リソースとして見ており、日本語の授業に活用したいという共通理解があるように推測できる。よって、文学教材をより扱いやすいものにするには、困難とされる点を解消し、求められる要素を再検討する必要がある、こ

れらの点を考察し、提案していくのが今後の課題となる。

Bio Data

関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科修士課程修了。現在、同研究科博士後期課程に所属し、日本語教育における文学教材の使用とその是非について研究している。非常勤講師も務める。

引用文献

- Edmondson, W. (1995). The role of literature in foreign language learning and teaching: Some valid assumptions and invalid arguments. *AILA Review*, 12, 42-55.
- Gilroy, M., & Parkinson, B. (1997). State of the art article: Teaching literature in a foreign language. *Language Teaching*, 29, 213-225.
- 池田庸子. (2005).「日本語教育における文学教材—国語教育における文学教材論を参考に—」.『茨城大学留学生センター紀要』, 3, 25-34.
- 伊藤博子. (1991).「読解能力の養成—学習ストラテジーを利用した指導例」.『世界の日本語教育』, 1, 145-160.
- 菊池民子. (1996).「日本語の読解におけるテキスト構造の影響と読解前指導の効果」.『日本語教育』, 95, 25-36.
- 大谷尚. (2008).「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」.『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』, 54(2), 27-44.
- Maley, A. (2001). Literature in the language classroom. In R. Carter & D. Nunan (Eds.), *The Cambridge guide to teaching English to speakers of other languages* (pp. 180-185). New York: Cambridge University Press.
- McKay, S. (2001). Literature as content for ESL/EFL. In M. Celce-Murcia (Ed.), *Teaching English as a second or foreign language* (pp. 319-332). Boston, MA: Heinle & Heinle.
- 南久園博美. (1997).「読解ストラテジーの使用と読解力との関係に関する研究調査—外国語としての日本語テキスト読解の場合—」.『世界の日本語教育』, 7, 31-44.
- Richings, V. A. (2012).「日本語教育における文学教材の可能性」.『言語コミュニケーション文化』, 10(1), 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会, 91-105.
- Vandrick, S. (2003). Literature in the teaching of second language composition. In B. Kroll (Ed.), *Exploring the dynamics of second language writing* (pp. 263-283). Cambridge: Cambridge University Press.
- Widdowson, H. G. (1983). "Talking Shop." *ELT Journal*, 37(1), 30-35.

付録

教師アンケート

問1. 日本文学作品（1.小説、2.詩・短歌・俳句、3.劇）を、教育機関における外国語としての日本語の授業で取り上げたことがありますか。当てはまるものにひとつ〇をつけてください。

【 はい いいえ わからない 】



「はい」と答えた方は問2に進み、その後、問4（6ページ）と問5（7ページ）にお答えください。

「いいえ」もしくは「わからない」と答えた方は問3（4ページ）に進み、その後、問4と問5にお答えください。

問2. 問1で「はい」と答えた方にお聞きします。

a) 具体的にどのようなジャンルを取り上げましたか。当てはまるものに〇をつけてください。

（複数回答可）また、作品名もお書きください。

1. 小説 2. 詩・短歌・俳句 3. 劇 4. その他（_____）

作品名：

b) 日本文学作品を取り上げたときについて教えてください。下の表1に示した日本文学のジャンルのうち、実際に授業で取り上げたものについて、以下のIからIIIのそれぞれの問いに関する質問について当てはまるものに〇をつけてください。（複数回答可）

I. 作品を選んだ基準は何でしたか。 II. 取り上げた形態は何でしたか。 III. 指導法は何でしたか。

表1 日本文学作品を取り上げたときについてお答えください（複数回答可）	1. 小説	2. 詩・短歌・俳句	3. 劇	4. その他（_____）
I. 作品を選んだ基準は何でしたか				
1. その作品が好きであるから				
2. 作品の日本語レベル				
3. 日本で人気作品であるから				
4. 海外で人気作品であるから				
5. CEFR の基準				
6. JF スタンドアードの基準				
7. ACTFL のナショナル・スタンダアーズの基準				
8. 職場で定められている教科書だから				
9. カリキュラムによって決められているから				
10. その他（_____）				
II. 取り上げた形態は何でしたか				
1. 教科書の中の一部				
2. 自分で作ったプリント				
3. 作品そのもの				
4. ネット上のもの				
5. その他（_____）				
III. 指導法は何でしたか				
	1. 小説	2. 詩・短歌・俳句	3. 劇	4. その他（_____）
1. 文法翻訳法				
2. コミュニカティブ・アプローチ				

3. ピア・リーディング				
4. オーディオリンガル・メソッド				
5. ストーリー・グラマー・アプローチ				
6. リーダー・レスポンス・アプローチ (文学理論アプローチ)				
7. その他 (_____)				

c) 日本文学作品を取り上げたときについて教えてください。下の表2に示した学習者のレベルのうち、実際に授業で文学作品を取り上げたレベルについて、以下のIVの問いに関する質問について当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

IV. 学習者のレベルと学習目標は何でしたか。

表2 学習者のレベル 学習目標	1. 初級	2. 初中級	3. 中級	4. 中上級	5. 上級	6. 超級
1. 聞く能力の向上						
2. 話す能力の向上						
3. 読む能力の向上						
4. 書く能力の向上						
5. 総合的能力の向上						
6. 文化気づき						
7. 日本文化入門						
8. 日本文学入門						
9. その他 (_____)						

d) 今後も、日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした授業に日本文学作品を取り上げたいと思いますか。当てはまるものにひとつ○をつけてください。その理由もお聞かせください。

【 はい いいえ わからない 】

↓

理由：

↓

問4と問5にお進みください。

問3 問1で「いいえ」もしくは「わからない」と答えた方にお聞きします。

a) 日本文学作品を外国語としての日本語の授業で取り上げたいと思いますか。当てはまるものにひとつ○をつけてください。

【 はい いいえ わからない 】

↓

「はい」と答えた方は、表の下のb)にお進みください。

「いいえ」もしくは「わからない」と答えた方は、下の表にその理由(二つ)をそれぞれお聞かせください。続いて、問4と問5にお進みください。

今まで取り上げなかった理由：
これからも取り上げないと思う理由：

問3 a)で「はい」と答えた方にお聞きします。

b) 日本文学作品をどのような形態で取り上げたいと思いますか。当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

1. 市販の教科書 2. 自分で作ったプリント 3. 作品そのもの 4. ネット上のもの 5. その他 ()

c) どのような作品を取り上げたいと思いますか。作品名もしくは著者名を書いてください。(複数回答可)

作品名もしくは著者名：

d) 日本文学作品を選ぶ際、何が基準になると思いますか。当てはまるものに○をつけてください。

(複数回答可)

1. 自分が好きな作品 2. 作品の日本語レベル 3. 日本で人気のある作品 4. 海外で人気のある作品 5. CEFRの基準 6. JFスタンダードの基準 7. ACTFLのナショナル・スタンダーズの基準 8. 職場で定められている教科書 9. 職場で定められているカリキュラム 10. その他 ()

e) どのレベルの学習者を対象に日本文学作品を取り上げたいと思いますか。そのときの学習目標は何ですか。下の表4の中の、当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

表4 学習者のレベル 学習目標	1. 初級	2. 初中級	3. 中級	4. 中上級	5. 上級	6. 超級
1. 聞く能力の向上						
2. 話す能力の向上						
3. 読む能力の向上						
4. 書く能力の向上						
5. 総合的能力の向上						
6. 文化気づき						
7. 日本文化入門						
8. 日本文学入門						
9. その他 ()						

f) 日本文学作品を取り上げるならどのような指導法で取り上げたいと思いますか。当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

1. 文法翻訳法 2. コミュニカティブ・アプローチ 3. ピア・リーディング 4. オーディオリンガル・メソッド 5. ストーリー・グラマー・アプローチ 6. リーダー・レスポンス・アプローチ (文学理論アプローチ) 7. その他 ()

↓

問4と問5にお進みください。

問4. a) 全員にお聞きします。下の表5の中の各項目について当てはまるものにひとつ○をつけてください。

表5	そう思う	少し思う	ない	どちらでもない	あまりそう 思わない	思わない そう
日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした授業における日本文学の使用について						
1. 日本文学は教材として価値のあるものである						
2. 日本文学は学習リソースの1つである						
3. 教科書は日本文学をもっと提供すべきである						
4. 日本文学を教材としてシラバスに取り入れるべきである						
5. 日本文学を取り上げる教材をもっと増やして欲しい						
6. 日本文学を取り上げるための類型やレベルなどについての基準が欲しい						
7. 日本文学を用いる教材があれば日本語の授業で使いたい						
8. 日本文学の類型やレベルなどについての基準があれば日本語の授業で使いたい						

9.教師にとって、日本文学作品を取り上げる授業の準備は大変					
10.教師にとって、日本文学を用いる教材の選定は難しい					
11.日本文学に関する自分の知識が足りるかどうか不安					
12.日本文学を用いるための授業時間が足りない					
13.初級レベルの段階では日本文学を取り上げることは難しい					
14.日本語能力の向上や日本文化の理解を目的とした日本文学の読解は学習者のニーズに応える					
15.学習者は日本文学を通して「日本語能力」を身につけることができる					
16.学習者は日本文学を通して「文化気づき」を身につけることができる					
17.学習者は日本文学を通して「自己啓発と批判的・分析的思考力」を身につけることができる					
18.学習者は日本文学を通して日本語学習の「動機付け」が得られる					
19.学習者は日本文学を通して「楽しく」日本語の学習ができる					
20.学習者は日本文学や日本文化の「美を鑑賞する」ことができる					

全員にお聞きします。自由にお答えください。

b) 日本文学作品を学習リソースの一つとして日本語の授業で取り上げるのに一番困難なことは何だと思いますか。

c) 日本文学作品を学習リソースの一つとして日本語の授業で取り上げるのに一番必要なことは何だと思いますか。



問 5にお進みください。

問 5 全員にお聞きします。ご自身について教えてください。

1. 母語： (_____ 語)
2. 日本語教師歴： (_____ 年 _____ カ月)
3. 機関： (当てはまるものに○をつけてください) (複数回答可)
 1. 日本語学校 2. 高校 3. 大学 4. 大学院 5. 地域の日本語教室 (ボランティアを含む)
 6. その他 (_____)
4. 担当する日本語レベル： (当てはまるものに○をつけてください) (複数回答可)

(今まで： 初級 初中級 中級 中上級 上級 超級)

(今現在： 初級 初中級 中級 中上級 上級 超級)
5. 今現在担当する授業： (当てはまるものに○をつけてください) (複数回答可)
 1. 日本語「読む」 2. 日本語「書く」 3. 日本語「話す」 4. 日本語「聞く」
 5. 総合日本語 6. 日本事情 7. 日本文化 8. 日本文学
 9. その他 (_____)
6. 日本文学を読むことが好きですか： (当てはまるものにひとつ○をつけてください)

【 はい いいえ どちらでもない わからない 】

7.最後に「日本文学と日本語教育」に関するご意見をお聞かせください。

お忙しい中ご協力をいただきありがとうございました。